

	<h1>W.A.Mozart Hiroba</h1> <p>「モーツァルト広場」 SINCE 1995</p> <h2>第34号</h2>
---	---



## モーツァルトの袖に友ありて

モーツァルトへの手紙 (その10)

会員番号 K.618 加藤 明

我らのモーツァルトがウィーン時代にロイトゲプやシュタドラーなどの演奏家やオペラ作家であるダ・ポンテ、シカネーダーといった非凡な才能の友人に恵まれたことは広く知られたことです。

友人あってのあの無類の名作群、と言っても過言ではありませんまい。

ですから、モーツァルトの天才が花開くためには、そして、モーツァルトが私たちに身近で血の通った人格となって迫りくる背景には、こうした多くの友人の存在を忘れてはならないと思います。

昨年12月5日はモーツァルトの祥月命日、没後223回祭にあたる日でしたが、我が《モーツァルト広場》が発足して丁度20年の節目の日でもありました。

会場の都合などから、二日繰り上げて12月3日(水)に中通のゲストハウス『ヴァレリアーノ』で会員とモーツァルトファン約70名が集い、20回目の「例会」をそれはそれは愉しく祝いました。

そして、私にとっては今回のアニバーサリーはこれまで支えてくれた多くの仲間への感謝の

念を反芻する記念の日ともなりました。

とりわけ、《モーツァルト広場》発足以来、私の浅学ぶりに呆れもせずアドバイスをくれ、励ましてくれた幹事諸兄にはひたすら頭が下がる思いで感慨一入のものがありませんでした。



さて、以下の雑文は昨年の夏に、或るプログとして書き記したものです。

年間5～6回開く「幹事会」の実態を露わに記述したものです。

発足20年の節目にあたり、読者諸兄に敢えてかつての駄文をお披露目する動機は、一人でも多くの会員の方々に幹事各位のモーツァルトは元より音楽への並々ならぬ見識と跳びぬけた愛情を知って欲しい、と思ったからです。

幹事会のメンバーにもいつの間にか高齢化の波が押し寄せて来ました。

ですから、本会にも次世代を担う若手のメンバーが求められている、と痛感しています。

どこまでもモーツァルトの愛聴団体であろうとする《モーツァルト広場》。

「幹事会」では若手のモーツァルトファンの参画を熱望しているところです。

【<sup>これ</sup>之を楽しむ者に<sup>し</sup>如かず】

開催が間近になった《モーツァルト広場》サマーコンサートの印刷物の校正や当日の段取りなどのために、先ごろ今年になって三回目の幹事会を行った。

幹事は12名いるのだが（因みに現在会員は101名）、ここ数年はほぼ6～7名の常連幹事で運営してきている（この常連メンバーは団塊の世代が多く、みんな内心は若い幹事を欲しがっているようだが……）。

偶然なことであるが、この常連幹事諸兄に共通する固有の特性は、一つに、「モーツァルトは言うに及ばず、幅広く世界の音楽をはじめ芸術をこよなく愛する精神」であり、もう一つは、「音楽のスペシャリストでない代表（小生）に対する、<sup>きめ</sup>肌理こまやかな惻隱の情とも言える友情と憐憫の精神」である。

これは、音楽を聴くことと音楽を演奏すること、この間にある気の遠くなるような隔たりを橋渡しする役割を幹事諸兄が担っていることを意味している。

小生にとって、ナマの音楽を聴くということは、何にも増して「生きている」ことの実感であり、それがモーツァルトであることで、至上の愉悦をもたらすものだから。

あと一つ共通する特性として、孔子の「之を

知る者は之を好む者に如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず」を地で行くような、人生の楽しみ方である（「それを知っている人より、それを好んでいる人を、それを好んでいる人より、それを自分のものとして楽しんでいる人でありたい」といった孔子の訓えに習う）。

いやあ、実に嬉しいのだ。

幹事の一人ひとりが、屈託なく自慢話や近況の思いの丈を披露する。

それらをしっかりと聴き取り、応える姿勢が全員に備わっている。

「正解」を気にせず疑問を語り、批判はあれど非難することなく、開放的な言葉と議論が宇宙的に展開するから、まことに<sup>かまびす</sup>喧しい。

この場合、まとめ役が不在なので、放たれた言葉にはそれぞれの発言者が責任を持つこととなる。

みんな、「そこ」に自分が居る、のだ。

これがこの特異なグループの大きな暗黙の規範であり特徴の一つと言えよう。

しかも、その話題は音楽的なものを中心に、読書論や旅行話や世界の歴史・文化、さらには時事問題やダジャレを駆使した高度な（！）下ネタまで、とめどなく、しかも途轍もなく拡大するため、脳が生き活きて来るから凄い。

因みに、この日はざっと以下のような項目・話題について語り合った。

●皮切りに、今回のサマコンのプログラム校正の検討（結構マジメなのだ）

- ・ 国民文化祭の準備や問題点などのこと
- ・ 直近のバリトン、Nさんのリサイタルのこと（久々に登場した新進気鋭のバリトン歌手なのだ）
- ・ ネヴィル・マリナーの最近の演奏や歴大な業績などのこと（「アマデウス」のBGMの演奏など）
- ・ 内田光子のシューベルト・ベートーベン・モーツァルト観のこと（日本を代表する音楽的知性）
- ・ シューベルトの夭折の原因（梅毒と腸チフスの関連）
- ・ 「モーツァルトの伯楽」という松本清張の小説のこと（その意外性を語る）
- ・ モーツァルトの死亡原因に絡むスヴェーテン男爵についてのあれこれ

- ・渡辺玲子や小山実稚恵などのコンサート、テクニックや近況情報(ストラディバリウスのこと)
  - ・兵庫県議のいささか破廉恥なニュースのことを興味津々と……(だれだ?)
  - ・集団的自衛権に絡む各紙の考え方などについて長い議論(口火はK氏)
  - ・歌舞伎を観劇した思いを味わい深く語ること(別のK氏の好い顔!)
  - ・「フランス・リストはなぜ女性を失神させたか」(新潮新書)についてS氏に打診しながら語る
  - ・「ファツィオリ」というイタリアのピアノ製造会社のこと(ブーニンが弾いているらしい)
  - ・楽器販売業の斜陽傾向と少子化のこと(爺さんが孫のために楽器を買ってあげる現実から……)
  - ・ムーティの来日記念演奏を聴きに行ったことの喜びを語ること(やはりK氏)
  - ・エレヌ・グリモアの「クレド」という特殊なCDの発見とお知らせ(ドヤ顔の奴がいて)
  - ・雑談中BGMで流したフルトヴェングラーのシューマンの演奏について(CDという創音についても)
  - ・理研問題、というより小保方さんへのおじさんのオマージュとやりとり(彼女を助けたくて)  
⇒その他のたくさんの気になること……
- 仕舞いに、小生がアーメリンクによるシューベルトのリート「幸福」をかける。みんなで二回聴いて、散会を促す(もう三時間半経過しているが、それでも席を立たないのだ……)。

こうした、たくさん話題が、あるときは鋭く、あるときはまどろんだ雰囲気の中で語られては、真剣に考え、笑い、冷やかし、褒めたり、共に納得し、味わって過ごすのだが、これってほんとに絶妙で、面白くて、止められない宇宙的なステージなのだ(その理由は、普遍性を求めているけれど、自説の影響力を全く気にしなくてもよい自由な空気があるからかもしれない)。

《モーツァルト広場》は、今年の12月のアニバーサリー・パーティーで、開設満20年を迎える(1995年12月5日にモーツァルトの命日を期して誕生)。

これまで、久元祐子女史はじめ多くの優れた演奏家にご厚誼をいただいていた幸運を忘れてはならない。

また、いつも快く協賛してくださる企業各社や熱心な会員各位、モーツァルトファンに支えられて今日の《モーツァルト広場》があることに思いを馳せる。

そして、何よりも、幹事諸兄の変わることはないモーツァルトと音楽への謙虚で高邁な姿勢と、知的に愉しもうとする気高い精神がこの奇妙な広場を支えてきた、と言って間違いはないのだ。

この稀なる秋田発のモーツァルトの愛聴団体がいつまで続くのかは知れたものではないが、きっと幹事諸兄一人ひとりがあの世に往くまで、貪欲に愉しむつもりでいる筈、と思っている。

end

## ドーリス・シュトックとシラー、モーツァルト —女流画家の描いた肖像画—

会員番号 K.203 松田至弘

愛好団体「モーツァルト広場」のコンサートでは毎回、会場のホールの前方に大きな額に入ったモーツァルトの肖像ポスターが掲げられ、雰囲気盛り上げている。

この肖像ポスターは、ドーリス・シュトック（1760～1832）なるドイツの女流画家が、1789年にドレスデンで描いた原画をもとに作られており、「広場」の加藤明代表がウィーンのフィガロハウス（現モーツァルトハウス・ウィーン）の売店で求めてきたものである。



ドーリス・シュトックの自画像（1795年ごろ）

ドーリス・シュトックの描いた肖像は、モーツァルトを一人の天才作曲家として理想化し威厳を持たせたものではない。それ故にかえって、モーツァルトのありのままの容貌と表情を伝えているようで親しみ深く、我々の心を捉えて離さないところがある。

そんな訳で今回、この肖像とそれを描いたドーリス・シュトックについて私なりに調べてみたが、意外な事実遭遇して驚きを禁じえないでいる。

何と、ドーリス・シュトックは、モーツァルトだけでなくドイツの詩人・劇作家であるフ

リードリヒ・シラー（1759～1805）の肖像をも描いた画家だったのである。世界に名高いこの文豪とすぐれた作曲家を、ドーリス・シュトックは何故描くことができたのだろうか。

ドーリス・シュトックは、ヨハン・ミハエル・シュトックとマリア・ヘレン・エンドナーの子として1760年にニュルンベルクで生まれている。その二年後には妹のアンナ・マリア・ヨコピナ（通称ミンナと呼ばれている）が誕生した。

父の職業は銅板彫刻師であった。ドーリスが5歳のとき、ライプツィヒのブライトコプフ印刷出版社と父が契約して彫刻師兼イラストレーターとして働くことになったので、一家はそこに移り、家屋の5階の屋根裏部屋に住んだ。

ドーリスは学校に行かなかったが、教区の牧師から読み書きや計算などの基本的なことを学び、母からは音楽の教えを受けた。そして、裕福なブライトコプフ家から頻繁に招かれ、レベルの高い教育を受けている子供たちと一緒に遊んだ。

父のもとには、当時ライプツィヒ大学の学生であったゲーテもよく訪れ、絵や版画について学んでいる。ゲーテはドーリスの父をアウアーバッハの安酒場（不朽の名作『ファースト』に登場する有名な酒場）に連れ出し、酒を飲み交わした。ドーリスとゲーテは、生涯に渡って親交を保った。

ドーリスは父から、その仕事台で絵の描き方や彫版術を熱心に学んだので、1773年に父が亡くなってもブライトコプフ印刷出版社との関係を維持し、仕事を継続することができた。

彼女は写実描写を得意とし、次第にオイル（油）、銀筆、パステルなどの画材を使って肖像を描くようになっていった。

こうしてドーリス・シュトックは、肖像画家、特にすぐれたパステル画家として知られるようになっていくのである。

次に、ドーリス・シュトックを含む4人のグループとシラーとの関係について述べることにしたい。

ドーリスとルートヴィヒ・フェルディナント・フーバー、クリスティアン・ゴットフリート・ケルナー（1756～1831）、ドーリスの妹のミンナ・シュトックの4人は、ライプツィヒで私的サークルを作るようになった。

ドーリスとフーバー、ケルナーとミンナは、恋人同士であり婚約者でもあった。フーバーは、大学で法律を学び自由な作家になることを目指していた。ケルナーは、大学で博士号と教授資格を取得し広い教養を身につけた青年であり、文学と音楽を愛しシラーの文学に強い関心を怠っていた。

ケルナーは、1783年からドレスデン上級宗教局顧問官を務めていた。そして4人は、ドーリスの制作した四つのミニチュア肖像を添えて、ライプツィヒからシラーに熱烈なファンレターを送ったのである。

シラーはすでに、戯曲『群盗』の出版とマンハイムでの上演によって成功を収めていたが、郷里のヴェルテンベルク公国の領主カール・オイゲン公の命令に従わず、厳しく処分を言い渡されて逃亡し、当時マンハイムに滞在し借財を背負い苦境に陥っていた。

こうしてシラーは、ケルナーらに宛てて自己の窮状を訴える手紙を書き、4人から誠意ある招きを受けると、新しい人生を切り開くためライプツィヒを訪れることになったのである。

シラーは4人グループの熱い友情に支えられ、ケルナーらの経済的援助によって、街から2キロほど離れたゴーリス村に滞在した。そして、1785年8月7日にケルナーとミンナがライプツィヒで結婚式を挙げドレスデンに移ると、その1か月後にシラーも後を追ったのである。

ケルナーの住居は、ドレスデンの現在の新市

街コールマルクトにあり、ドレスデン近郊のロッシュヴィツにも屋敷を所有していた。シラーはケルナーの住居のすぐそばのアパートに入居し、また、ロッシュヴィツの家をも使用して経済的に安定した状態で戯曲『ドン・カルロス』の執筆に取り組んだのである。

読者の中にはおわかりの方もおられると思うが、こうした真の友情の感動と喜びから生まれたのが頌詩（しょうし）「歓喜に寄せて」で、ゴーリス村滞在中に草稿が作られ1786年に雑誌「タリーア」の第2号に掲載された。これこそが、ベートーヴェンの「第九交響曲」終楽章の合唱の歌詞になったものである。

ところで、ケルナーとミンナはドレスデンに住むと、その家庭を魅力的な文化サロンにしていた。そこには、詩人、文学者、音楽家、画家などが次々に集うようになっていったのである。

ドーリスもケルナー家へ引っ越し、一緒に生活している。この家に彼女は、居間兼アトリエと小さな寝室を持ち、パステル画、油彩画、銀筆画を次々に描いた。ドレスデン美術アカデミーの会員になっている。



フリードリヒ・シラーの肖像  
(1787年)

こうしてドーリス・シュトックは、幸運なことにシラーの肖像を三枚も描くことができたのである。1787年に若きシラーを描いた作品は、左側から横顔を描いており、モーツァルトの肖

像よりも斜めを向いたものになっている。

最後に、ドーリス・シュトックと彼女の描いたモーツァルトの肖像についてまとめてみることにする。

シラーとモーツァルトは、ドレスデンで一度も顔を合わせたことはなかった。というのもシラーは、歴史研究にもとづいて『ドン・カルロス』を執筆し、それが完成して出版されると1787年6月にドレスデンを去り、やがてワイマール公国に定住することになったからである。

モーツァルトがフリーメイソン会員で音楽愛好家のカール・リヒノフスキー侯爵と一緒に北東ドイツ演奏旅行に出発し、ドレスデンに立ち寄ったのは1789年4月12日から18日までである。シラーがドレスデンを去ってから2年近くの年月が経過していたことになる。

モーツァルトは、ドレスデンから妻のコンスタンツェへ二回手紙を書き様子をこまかく知らせているが、その中にはケルナー家を訪ねたという記述はない。おそらく4月16日か17日に社交的に訪問したのではないかと考えられる。

ドーリスはグスタフ・パーゼイなる人物に、この時のモーツァルトの訪問について次のようなエピソードを語っている。

モーツァルトはディナーの少し前にやってきて、溢れるばかりに話をした後、ピアノに向かって座り即興演奏を続けた。隣の部屋に食事を準備し、給仕人や自分が誘っても演奏をやめようとしなかったので、スープや焼いた肉が冷めてしまった。……

それはともかく、こうしてドーリス・シュトックは天才作曲家モーツァルトを素描する機会に恵まれたのであった。ドーリスが製作した肖像は、右向きの横顔のモーツァルトである。それは厚い象牙紙に描かれた小さな銀筆画で、寸法は7.6×6.2cmである。この肖像画は現在、ザルツブルクの国際モーツァルテウム財団が所有している。



モーツァルトの肖像（1789年）

#### ドーリス・シュトックの銀筆画

「……このモーツァルト・プロフィールは、モーツァルトの晩年ならぬ晩年の時期の状況を問わず語りに物語っているかのように、その悲し気な表情が、多くのモーツァルト愛好家の心を捉えてきたものである。

私もこの銀筆画のモーツァルトの表情に窮えるなんともいえぬ憂いを含んだ影といったものにつよく惹かれてきたが、この女流画家が描いたモーツァルトの横顔の幾分上向きの視線を顔とともに三十度程下げ、右眼がわずかに見える位こちらへと向けると、それがほかならぬランゲの未完の肖像画にそっくりなのに気づいたのはほんの数年前のことだった。

モーツァルトをじっさいにモデルとして描いた肖像画であるだけに、似ていないほうが奇妙だというのは常識的な見方であろう。」

（海老沢敏『横顔のモーツァルト』音楽之友社より）

## 再生された時間

会員番号 K.478 岡 部 久 子

私は時間を“編み物”の中に  
ずい分閉じ込めてきた  
降り続く雪の期間  
白いウツが積もる間  
赤い糸をたぐり  
青い糸をたぐり  
ストーブの上のヤカンのたぎる音を  
ききながら  
窓の外のエサ台に集まる小鳥達をみながら  
春の野山を歩くことを思いながら  
セーターや靴下に編み込んだ長い冬の時間

今年の年賀状に羊と毛糸のソックスの絵を描き「…、ひたすら編んで春を待つ」と書いて親しい人達へ出した。

春になって竹子さんから思いがけないハガキが届いた。一見して“わあ”と驚いた。

色とりどりの毛糸の靴下12本が並んでいる写真が張り付けられていて「お元気ですか。35年前のセーターの残り糸で何かにとりつかれたように編んでいます」と短いコメントが添えられていた。竹子さんは、かつて昔、私が中学校の教師時代、美術の時間で教えた、教え子である。（その後、私は教師をやめ）何十年ぶりで、街中でぱったり出会った竹子さんに声をかられた。それ以来、彼女との交流が続いている。

今では、彼女も孫がいる身。でもうれしいことに、絵もずーっと好きだったようで、折々に届くハガキのイラストはすばらしい。家事のあい間に人形作り、藍染め等々もやった。

とにかく「創ること」が大好きな主婦である。今度の靴下も、色どりが自由自在。楽しい配色だ。どれ一つとして同じものがない。ということは、左右同じ配色のペアをはくとすれば、12

足編んだことになる。「ワオ」と叫びたいほどうれしくなった。

編み出すととまらなくなる。分かるなあ。

創ることはやめられない——

35年前の竹子さんと家族の生活の色どりが復元されている様な写真を私はカードスタンドに立てた。

元気が出た、もう一つのお話。

ご主人を亡くして最初の冬を雪深い町で一人で過ごす友人の咲子さんのことが、天気予報で小坂零下何度、とみる度、心配になる。メールしたり、電話したり出来るだけ笑える話を手紙に書いた。

——朝は、玄関の戸を開けて、朝の空気をすう。必ず台所に立って、味噌汁だけでもいいから作ってね。私もそうしてる。台所仕事をしながら歌を歌うと、体が楽になる。

最近は、昔の股旅ものを歌ってる。

“影か柳か勘太郎さんか〜”などとね——

手紙を書いているうちに「旅笠道中」の歌詞は、どこか現代の若者のかなしさに通づる所がある気がしてきて、ついでにその歌詞も書き加えた。

即、咲子さんから「手紙読んだよ。」と電話が返ってきた。

「旅笠道中、あれね、子どもの頃、私も歌ってた。“亭主持つなら堅気をおもち”なんて歌って、母に叱られて…」

2人は電話で一緒に歌いだし、大笑いした。昭和10年代の子ども達は、巷に流れている大人たちの歌を、歌詞の意味なんか分からないで、ただ、気持よく大声で歌って親達に、「そんな歌、うたうんじゃない」と叱られたものだ。

「実はね」と咲子さんが“旅笠道中”がなつかしいもう一つのワケを、電話で話した。

後日、「あとで送るから」と、約束した一枚のCDが届いた。

16年前のラジオ深夜便の東海林太郎特集。咲子さんの投稿した手紙が採用されて中で読まれているという。カセットテープからCDにコピーしたものだ。東海林太郎の声は、こんなに伸びやかだったのか、伴奏のタンタカターンは、子どもの頃口まねしたとおり、単純なリズムでなつかしい。歌と歌の間に、「お便り」が読まれる。

柔らかな男性アナウンサーの声だ。前回の上原敏特集をきいての感想が続く。上原敏は、東海林太郎とデュエットしたこともある同時代の歌手なのだ。『上原敏がニューギニアの戦場で病死したことをはじめて知りました。私の夫も戦場で死にました。上原敏は数々の歌を残しました。夫は私に2人の子を残しました』心にしみる。

『…早々と結婚させられたその夫は、戦死し、まだお前は若いと、再婚させられた夫も、また戦場へ行き帰って来ませんでした…その昔話をすると孫がおばあちゃん可哀そうという』私は上原敏特集をなつかしくきいていた人達の今の年代を想像する。

「旅笠道中」の歌のあと咲子さんの「便り」が読まれた。『…午前3時、なに気なくラジオ

をつけたら上原敏特集をやっていました…。夫からきいた話では、上原敏は、夫の叔父と中学時代同級生で野球も一緒にやっていた家で泊ったこともあるといいます。地元へ帰ってきた時のまだ歌手として最初の頃の歌は、秋田ナマリがあったそうな…（上原敏は大館出身）。…夫をおこそうと思ったけれど、すやすやねむっている。深夜便はねむるためのもの、と思いそのままおこさないでおきました。やがて4時、夫はトイレに立ち、私はだまってそれから眠りました。』と咲子さんのお便りは終わっていた。

咲子さんの16年前の深夜の時間だった。

とじこめられた昔の時間の再生があった——。さて、咲子さんと私の近況。

朝、玄関の戸を開けて外気を入れるどころか、一歩も外へ出られないほどの雪にとざされた厳しい冬を、無事のり越えた咲子さんは、パソコンに35年間の自作の短歌を入力中。毎月、同人誌に短歌を送り続ける。「いつも、同じ題材になってしまって、もうっ！」などと言いながら。

私は、朝、定番の味噌汁、納豆にあきることなく、食後はラジオをききつつ、夫の入れたコーヒーを飲む。ここちよい曲が流れている。

日常は平凡でも

人生は、平凡であるはずがない。

台所に

きょうも歌あり

セ・シ・ボン

## あきた県民文化と芸術

会員番号 K.10 畠山久雄

いので「文化」を加えたとの回答である。

「芸術祭」は単語であり、これに「文化」という単語を加えて「文化芸術祭」？

なんか変ではないかと感じたので、調べてみた。

昨年まで「あきた県民芸術祭」として開催されていた行事が、今年からは「あきた県民文化芸術祭」に変更されたことを知った。県の担当者にその理由を伺ったところ、去年は国民文化祭が開催されたこと、芸術祭というと範囲が狭

芸術祭を調べてみると、「文化庁芸術祭」「文化庁メディア芸術祭」「大地の芸術祭」「札幌国際芸術祭」「水と土の芸術祭」等々、芸術祭を一つの単語として扱っている。

つまり、〇〇芸術祭という場合、〇〇には主催団体とか芸術の範囲が書き込むのが一般的である。

一方、文化というものは芸術を含む大きなくくりであり、文化芸術祭は日本語として疑問である。

秋田県が望むように芸術祭の範囲を文化全体に広げたいとするならば、文化祭が相応しいのではないか。多少語呂は悪いが芸術文化祭であれば日本語として成立するであろう。

希な解釈として、県民の芸術祭から、県民文化の芸術祭への変更と捉えれば言葉としては成立する。そのことで、普遍的芸術である合唱、吹奏楽、オーケストラ、演劇、舞踊、邦楽、文

芸、美術などは、狭い意味の県民文化ではないので「あきた県民文化芸術祭」に参加してはいけないかも知れない。

<<蛇足>> 一説ではあるが、文化は以下を含む大きなくくりである。

○生活文化（衣食住やコミュニケーションなど）

○制度文化（社会の守るべきルールや規範的な価値観の形成）

○術文化（学術・芸術・技術）

文化の中に芸術が含まれるので、文化芸術祭という単語は日本語としておかしい。

一方、「文化芸術」という単語は、文化や広い意味の芸術といった意味であり、文化芸術振興や文化芸術活動といった使い方をする。これに「祭」をくっつけて単語にするのは間違いであろう、サイッ！

## 酒とモツの日々（34）

会員番号 K.488 佐藤 滋

「モーツァルト 伝説の録音」というCD集が今年1月発売になりました。1930～1940年代の名演奏を集めたセット物ですが、第1集の「ヴァイオリン奏者編」だけでも2万3千円以上するので貧乏な愛好家にはとても手が届かないものでした。けれども何と会員のT氏がポケットマネーで購入され、モーツァルト広場へ寄託・貸出自由として下さった。さっそく代表に連絡して高価な出版物に耳を傾けることができました。

12枚のヴァイオリンCDを楽しく聴き続けてゆくうち、この名演奏を三つのグループに分けて聴いている自分に気づきました。それは、

①共感し感銘を受けた演奏。スケールは小さ

く、現実逃避のような気もするが、清潔な音による、丁寧で優しい歌い方に心が癒されるような表現。

②違和感や戸惑いを感じる演奏。強固な音、強い表現意欲で迫ってくる表現。ベートーヴェンなら向いているかもしれないが……。反発しながらも心に引っかかる演奏。

③上手いけれども、ただ耳元を過ぎてゆくだけの演奏……。

（演奏の好みなど、しょせん個人的・主観的なものですから、何ら意義も価値もない思い上がりに過ぎませんが）

さて、①の代表格としてはクーレンキャンプ、シュタンスケ等、②の代表格はフーベルマン、

ブッシュ等ですが、経歴を調べている内に、この人びとには共通項があることに気がつきました。

①は、ナチス体制下のドイツに留まり、戦後糾弾された人々。有名な指揮者フルトヴェングラーもそうですが、クーレンキャンプは失意の内に早死にし、シュタンスケは楽界から消えてしまいます。モーツァルト同様、世渡りが下手な芸術家でした。(これに対し、逆境を乗り越え、帝王にまで上り詰めたのがカラヤン)

②は、ナチスに対抗し、戦後は糾弾の先鋒になって活動した人々。この人々は才能だけでなく行動力や政治力にも恵まれていました。(フーベルマンはユダヤ人音楽家を集めてイスラエルにオーケストラを組織し、ブッシュはマールボロ音楽祭を創設)

ちなみに③の代表格は、人格者で超天才なメニューイン、完璧主義者で唯我独尊のハイフェッツ等。(……あくまで個人的な感想です)

しかし、ここで新たな疑問が……。なぜ強い印象を与えた①②の演奏家が今は忘れ去られ、③の人たちが今も偉大な演奏家として名声を保っているのか、ということ。強い印象を残す人々は、時代の証言者としては存在し得ても、時代を超えた存在とは成り得なかったのではな

いか。反対に、メニューインやハイフェッツこそが、永遠の命をもつ演奏家なのではないか……。けれども、戦前の演奏を続けざまに聴き、その時代の空気を感じていると、①②の人たちの演奏こそが強く伝わってくるのです。大戦前夜の時代を生き延びた演奏としての再評価が、このCD企画につながったのかもしれませんが。

今年になって日本人も巻き込まれるテロが世界に広がっています。これは脅しと暴力が蔓延し、やがて世界大戦へと拡大した1930年代とよく似ています。イデオロギーから宗教へと、その対立軸は変化していますが。

モーツァルトは教会や貴族の締め付けの中で、ささやかな喜び楽しみを求め続けた人でした。酒を愛しながら、人間の普遍的な快樂、夢、憧れを紡いだのが彼の音楽です。

たくさんの栄光、それ以上の挫折。涙に濡れた彼の手から生まれた最後の曲は「涙の日」でした。怒りに我を忘れ、暴力の連鎖が懸念される現代にモーツァルトはどんな存在なのか。どんな役割を担うことができるのか……。

「傷ついて、まるくなる人、とがる人、人の痛みに寄り添う人」

今の痛みに寄り添ってくれる、そんな演奏との素敵な出会いがありますように。

## 事務局より

一年先のお話で恐縮ですが……。モーツァルト広場は来年20回目のサマーコンサートを開催します。アトリオン音楽ホールを予約し、出演メンバーが決まってまいりました。まだ公にできないのかな？ 幹事としてその顔ぶれを見るだけでとてもワクワクしています。来年のことを言って鬼が笑わないように気を引

き締めて素晴らしいコンサートにできるよう手伝ってゆきます。皆さんも来年のこの時期に秋田ではなかなか聞くことができない素晴らしい楽曲の数々を耳にすることができると思います。楽しみにしててくださいね。

(K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております(H27年7月現在101名) [モーツァルト広場](#) [検索](#)  
 入会金：¥2,000 年会費：¥3,000 (諸会費、別途)  
 お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058  
 又は 本田 (事務局) 080(1673)8322